

William Bradford: *Of Plimmoth Plantation* について

佐 瀬 順 夫

序

Mayflower 号がアメリカの植民について果たした使命・役割は広く知られているが、その乗組員であり、Pilgrim Fathers の指導者であった William Bradford, またその著 *Of Plimmoth Plantation*, さらにその文学上の重要性については、日本ではまだあまり知られていない。またアメリカ文学史でもこれに重点を置くものは少ない。その意義を解明し、その正当な位置づけをするのが本論の目的である。

I. その背景

事の順序として、本書の成った歴史的な背景から初めなければならない。となれば、これは教会史の問題となる。英王 Henry VIII (在位 1509-47) は王妃 Catherine との間に王女 Mary を得たのみであったことから、離婚を計って教皇に入れられず、ついにローマから離れて英国教会 (Anglican Church, Church of England) を立て、国王が教会の首長たるべしという Act of Supremacy を宣言した。また Thomas Cranmer の意見により、侍女 Anne Boleyn を妃にし、その間に後の Elizabeth I を得た。それで新教徒 (Protestants) の力は一応増大した。1547年 Henry VIII 死し、Edward VI の即位となるが、彼は Henry VIII と Jane Seymour の子で、在位 7年の間 Cranmer が勢力をふるい、教界は Calvinism の色彩が濃厚となり、Act of Uniformity が発布され、礼拝には一定の規準がもうけられた。1553年 Mary I の即位となるが、彼女は Catherine の子で Protestant にはうらみが深く、Spain の王子 Philip II と結婚し、ローマ教皇に赦免をこうて、英国教会は Roman Catholic に復帰し、Protestants の迫害が初まった。Cranmer は1556年焚刑に処せられ殉教したが、やがて Mary は人望を失い、1558年失意のうちに世を去った。そこで Anne Boleyn の子 Elizabeth の即位となり彼女の長い治世となるが、その間 Act of Supremacy, Act of Uniformity の再発布となった。教会は然し Calvinism の単純さに帰ることなく、Roman Catholic 的な儀式も温存した。Elizabeth は Armada を撃滅し、その治世は隆隆と栄え、Protestants の勢力が増したが、その中でも急進分子は国教のあいまいな態度にあきたらず、冷厳に身を持し、自己の生活を

purify しようという方向を旨したので、彼等はあだ名で Puritans と呼ばれるに至った。Elizabeth は政治的意図から Puritans を好まず、国教の名の下に教会の統一をはかって、それにそむくものを罰した。

さて Puritanism に根ざし国教会に反対する団体を Nonconformists または Dissenters と呼んだが、その中で最初に出来たのが Presbyterian Church (長老教会) である。それはその団体の presbyters (長老) が教会の主導権をにぎるもので、社会的な地位に左右されがちである。そこで別な Dissenters の一派を生じるにいたった。彼等は Independents とよばれ、各人が平等の権利の上に立つことを主張した。その先達が Robert Browne (?1550-?1633) で、彼等は教会独自の主権——そこでまた国教会から分離すること——を主張したので Separatists (分離派) とも呼ばれた。この派がのちに New England で Congregational Church (組合教会) を作るようになるのである。

1603年 Elizabeth は死んだが後嗣者がなく、Scotland から James VI が迎えられて位についた。これが Stuart 王朝の初まりで、James VI は England 及び Scotland の王 James I となった。彼は学者に命じて Authorized Version of the Bible を完成せしめた功績はあったが、divine right (王権神授説) の信奉者で、彼の治世に信仰の自由をもとめて国外に移住するもの多く、本論主題の Puritans の渡航はこの時代を背景としている。

James I は1625年に死し、その子 Charles I が即位する。彼も divine right を主張し、ついに Puritans と衝突し、Civil War (1642-49) となり、Oliver Cromwell (1599-1658) に滅ぼされ、ここに Commonwealth が成立し、Puritanism の時代になることは歴史の記すところである。

II. その著者 (William Bradford) 及び Mayflower 号の渡航

England の Yorkshire, Austerfield で父なし児の William Bradford は Puritanism の教義を説く牧師 Richard Clyfton の感化を受けることになった。1606年12マイル程はなれた Gainsborough に Robert Browne の系統をひく Separatists の仲間の教会が出来、Bradford はその仲間に加ったが、のちこの教会は二つにわかれ、彼は彼の

家に近い Scrooby に出来た小さなグループに属することになった。このグループを牧したのが Clyfton であった。さらにこのグループの支柱となったのが Cambridge 出身の William Brewster であった。彼は Elizabeth の廷臣に仕え、その主人が没落から出身地 Scrooby に帰って父の業の郵便局長と土地管理人の仕事を継いだ。この邸で彼は Separatists の仲間の世話をしたが、父なし児の若い Bradford は、彼に父の姿を見るようになった。更にこのグループに加ったのが、もう一人の Cambridge 出身者 John Robinson で、彼も強い信念のもとにこの教会の養成に力をつくした。

1607年彼等の仲間の5人が、国教に不従順であるとして宗教査問会に引き出された。その中に Brewster も入っていたが、この時から事実彼等は公に信仰集会を持つ事は不可能になった。

彼等の仲間は統続と自由の地オランダに難をさけていたが、1608年、この Scrooby group も苦難の末国を脱出し、先ず Amsterdam でしばらく過し、ついに Leyden に定着した。彼等ははた織り、大工、石工等の職で身を立て、Bradford は織物業者となり、Brewster は印刷所を建てた。この様に、同じ信仰に根ざした仲間の集団が Robinson や Brewster の指導の下に異国の地で作られたのであるが、次第に不都合な点も現われて来た。第一賃金は安く、生活が容易でなかった。また子供たちはオランダの風習にそまり、安易な生活や誘惑におちこむけは見ええた。それで彼等は新世界に自由な信仰の地を求めたのであるが、1620年2月 Virginia Company の特許状による交易場をアメリカに作る契約をロンドンの商人及び企業家 (adventurers) との間に結んだ。

然し仲間全員がアメリカ行きに賛成したわけではない。むしろ多数は Leyden に残ることを希望した。Brewster のもとに新世界にうつり住む事を決心したのは比較的少数の人びとであった。それで Speedwell 号という60トンの帆船、さらに180トンの Mayflower 号をやとい出帆の準備をした。7月1日 Leyden の人たちは Speedwell 号で Delftshaven の港を出、Southampton で Mayflower 号とおち合ったのであるが、そこにはすでにロンドンの商人たちによって、労働者として備われた老若男女約80の人たちがいた。それでこの植民者には Puritans だけでなく、異質の人たちもまじっていたわけである。

さて8月15日にこの二隻は出帆したのであるが、Speedwell 号の船長は水がもると言い出し、一応二隻とも引かえすことになった。ついに Speedwell は航海にたえぬということになり、Mayflower 一隻だけを使用という決論が出て、行く人数も制限され、1620年9月16日に Plymouth の港を出帆したのである。途中暴風のため船の梁にひびが入るような難儀にもあったが11月19日に陸

地が見え、これが Cape Cod であることが分った。彼等は特許状の示す南へさらに船を向けたが、波が荒く、ついに Cape Cod の内側の港、現在の Provincetown に船をとめることになるのだが、それに先立ち、同日船中で有名なメーフラワー契約 (The Mayflower Compact) を作り、41名の成人がこれに署名をした。これは上陸後の不平不満をおさえ、政治共同体 (a civil body politick) を作らんがためであった。

Cape Cod harbor に船を留め、数回の探検隊を出す、当時31歳の Bradford はいつもその中心となっている。第一回の探検のあと帰船して見ると彼の妻はいない。海におちて死んだ(あるいは自殺?) という。然し、彼はこの手記の中でひとこともそれにふれていない。公私混同をさける厳正な気持からか——そこにまた悲痛な英雄の心事がうかがえる。

12月18日に Plymouth を発見し、ここに Mayflower 号をまわして上陸したのが同26日である。この地は北緯42° 近く(北海道の南端)に当るが、厳寒を目がけての上陸であり、それから設営にかかったのであるが、寒さ、うえ、病氣(壊血病など)のため、一冬をこすうちに、102名の渡航者が、約半数に減った。が、春になって、近くに住む Wampanoag Indians の首長 Massasoyt と和平条約を結び、其後も数々の苦難・試練にぶつかりながらも、この植民の灯を消さずに保つことが出来た。こうした中であって、初代の知事 John Carver のあとをうけて Bradford は彼の死にいたるまで36年の間、大方知事として彼等の支柱となり、その信念によってこの大業をなしとげたのである。

III. その成立——由来

Bradford の書いた原典は vellum (子牛皮紙) 装訂の冊子で、今でも克明なペン字がはっきりと読みとられる。現在ボストンの State Library の厚いガラスばりの台に安置されてあるが、ここに至るまでの経過が中々こみ入っている。彼が巻末に記した所によれば、1630年に書き初められ、1646年に至るまで年をおうて書かれており、またその後1650年までかき加えられた部分もある。

この原典は Bradford の長子 Major William Bradford に伝えられ、さらにその子 Samuel に渡された。その間 Bradford の甥にあたり、New Plymouth 植民地の長官となった Nathaniel Morton が、この地の最初の歴史書である New England's Memorial (1669) を書くためにこの原典を用いた。また Increase Mather 及びその子 Cotton Mather がその著述にこの原典を使っている。(後者はその名著 *Magnalia Christi Americana*, 1702 で) その後 William Hubbard と Samuel Sewall が更にこれを取り受けた。さてボストンの Old South Church の牧師

Thomas Prince は歴史資料を集めることに専念したが、彼の教会の steeple room を New England Library とし、彼自身も New England の歴史を書こうとして、1728年 Plymouth に Major John Bradford を訪ね、それを買い受けようとした。Major は「手放す気は毛頭ないが、もし必要なら判事 Sewall から受け取るように。」とのことで、それが実行された。Major はまた、「自分も一度熟読して見たい。またこれは息子 Samuel の所有とする。」という条件をつけた上、原典を New England Library に置くことを認めたという。Prince は彼の著 *Chronological History of the New England* (1736) にこの原典を利用したが、原典は彼の集めた他の図書と共に Old South Church に残された。

知事 Thomas Hutchinson はその著 *History of Massachusetts Bay* (1767) に、またこの原典を使用している。ところが革命(独立戦争)のどさくさがあったのち、この原典は New England Library から姿を消していた。Hutchinson は Tory であり、彼は1774年英国に行っている。そこで一応彼が英国へ持って行ったとの疑惑もなり立つ。

然し他の考え方もおこり得る。というのは革命の間、この教会は英軍の騎馬学校となっていたことがあり、その間この library は荒らされ、この原典以外にも見当たらない図書もあった。

次に舞台は英国に移る。1884年 Bishop of Oxford の Samuel Wilberforce が *A History of the Protestant Episcopal Church in America* を出し、その中でまぎれもなくこの原典からの引用と思われる記載をしている。然もその注に“Fulham M.S. History”という自分の居所(Fulham Palace)の名を記している。更に1848年、The Rev. James S. M. Anderson が *History of the Colonial Church* を出版したが、この原典を利用し、それが Bradford の書いたものであることを述べている。1849年に Wilberforce の *History* は New York でも出版され、また同年ロンドンの Joseph Hunter という Society of Antiquaries の Vice President が Pilgrim Fathers についての pamphlet を原典にふれずに出している。

1855年ボストンの John T. Thornton が Wilberforce の著書の中の記述を発見し、これを *History of Massachusetts* を書いていた The Rev. John S. Barry に示した。Barry は更に当時 Massachusetts Historical Society の出版物を編集していた Charles Deane にこれを示した。Deane は早速前記 Hunter に手紙を書き、原典を調べ、また写してほしいと頼った。当時の Bishop は心よく原典を Hunter に借し、また Hunter はそれを書写する人を備って、ここに久しぶりで原典の全貌がうかがえることになった。

それではどうしてこの原典が Bishop of London の library に入ったものか。前記 Hutchinson がアメリカからもち出して進呈したものか——然し彼の性格から、それはあり得ないだろう。多分、英国の兵士が Old South Church の書庫から戦利品として持ち帰り、二束三文で本屋に売りとばし、それを誰か——多分 Bishop of London——が買い取り、Fulham Palace Library に入ったものでもあろうと歴史家は推測する。

それでアメリカ側としては当然この原典を返却してもらおうという問題が起きる。然しそのことが実現するためには40年の歳月を要している。数々の請願や尽力の末に最後の努力が Massachusetts 出の上院議員 George Frisbie Hoar によってなされ、1896年 American Antiquarian Society, Pilgrim Society of Plymouth, New England Society of New York の合同請願がしたためられ、アメリカの大使も中に立ち、また国際関係も幸して事情が好転した。1897年英米双方の了承のもとに「Massachusetts の知事がそれを安全に保管する。」ことになった。1897年5月26日、この原典は正式にボストンの State House で引渡され、その夜 American Antiquarian Society 主催の大饗宴となった。筆者は“Little Neck Clams and Oysters”に初まり“Coffee”に終るその menu を Harvard 大学の図書館で探しあて、しばし感慨にふけたのである。

IV. その内容——文学としての Of Plimmoth Plantation

本書 *Of Plimmoth Plantation* は歴史書として扱われるのが普通であるが、これは単なる歴史書ではない。信仰の自由を求める Pilgrim Father たちの「モーゼ」(Moses)として彼等をひきつれ、束縛を脱出し、新天地に植民の灯をともし、その後茂り栄えるアメリカ文化に大きな筋金となった不屈な魂の真摯な記録である。これは文学作品に見られる fiction ではない。彼等の苦難にみちた生活の、血のにじみ出る、克明な document である。然も Bradford は最初に極めて平明に、淡淡と事実を語り度いとことわっている。

AND first of ye¹¹ occasion and indusments ther unto; the which that I may truly unfould. I must begin at ye very roote & rise of ye same. The which I shall endeavor to manefest in a plaine stile, with singuler regard unto ye simple trueth in all things, at least as near as my slender judgmente can attaine the same.

1. 彼の心情はあくまで深く信仰に根ざして居り、彼の記述はあらゆることを神のみわざとし、神慮の前にひれふす謙讓なたましいの表現である。然も彼は幼少の頃から聖書の熱烈な愛読者であり、従って聖書に refer し

た箇所が非常に多い。実に彼はまた広く古典や歴史に興味をもち、彼自身また Brewster の蔵書なども加えると、この植民地にもかなりの図書があった。それで彼の学識を表わすそれ等への reference も随所に見られる。ここで文学としてこの作品を見る場合には、彼の高揚した文体、またその graphic な筆力に注目すべきであろう。

And y^e time being come that they must departe, they were accompanied with most of their brethren out of y^e citie, unto a towne sundrie miles of called Delfes-Haven, wher the ship lay ready to receive them. So they lefte y^e goodly & pleasante citie, which had been ther resting place near 12 years; but they knew they were pilgrims³⁾ & looked not much on those things, but lift up their eyes to y^e heavens, their dearest cuntrie, and quieted their spirits. When they came to y^e place they found y^e ship and all things ready; and shuch of their freinds as could not come with them followed after them, and sundrie also came from Amsterdame to see them shipte and to take their leave of them. That night was spent with litle sleepe by y^e most, but with freindly entertainente & christian discourse and other reall expressions of true christian love. The next day, the wind being faire, they wente aborde, and their freinds with them, where truly dolfull was y^e sight of that sade and mournfull parting; to see what sighs and sobbs and praires did sound amongst them, what tears did gush from every eye, & pithy speeches peirst each harte; that sundry of y^e Dutch strangers y^t stood on y^e key as spectators, could not refraine from tears. Yet comfortable & sweete it was to see shuch lively and true expressions of dear & unfained love. But y^e tide (which stays for no man) caling them away y^t were thus loath to departe, their Revē^d: pastor falling downe on his knees, (and they all with him.) with watrie cheeks comended them with most feavente praiers to the Lord and his blessing. And then with mutuall imbrases and many tears, they tooke their leaves one of an other; which proved to be y^e last leave to many of them.

Bk. I, Chap. VII.

彼等が今まで Leyden で一緒に暮した同僚たちと別れる場面であるが、これから再び帰る事の出来ない国に旅立つ——だが、彼等は「旅をするもの」(pilgrims)³⁾であることを知っている。それで目を巍然と天にむけ、波だつ心を静めるのである。港で別れの一夜をすごし、次の日は順風でいよいよ出帆なのだが、はとばに見ていたオランダ人たちも思わずもらい泣きをする。やがて牧師が彼等のために最後のおいのりをし、彼等の大方のものが

今生の別れとなる。まことに淡淡とした筆であるが切切とせまるものをもっている。

65日の難儀な航海を経て、やっと Cape Cod につくのであるが、先ず陸地に足をふみしめた感激が語られる。然し時はもう冬であり、荒涼とした荒野、またそこに居るであろう野蕃人、また野獣以外には迎えてくれるものもない。後をふりかえればもう帰ることの出来ない大海原。また乗ってきた船が安全かという、船長船員たちは彼等にさっさと上陸してもらい、自分達はなるべく早く帰りたいという。温い助けの望みはどこからも期待出来ない。ただひたすらに神の恩寵を仰ぐのみである。然しこの苦難に対しては、子孫たちはきっとほこりをもって我我をたたえ、また神のみ業の尊さをさとるであろう——と Bradford は綴るのである。

Being thus arived in a good harbor and brought safe to land, they fell upon their knees & blessed y^e God of heaven, who had brought them over y^e vast & furious ocean, and delivered them from all y^e periles & miseries therof, againe to set their feete on y^e firme and stable earth, their proper elemente. And no marvell if they were thus joyefull, seeing wise Seneca was so affected with sailing a few miles on y^e coast of his owne Italy; as he affirmed,⁴⁾ that he had rather remaine twentie years on his way by land, then pass by sea to any place in a short time; so tedious & dreadfull was y^e same unto him.

But hear I cannot but stay and make a pause, and stand half amased at this poore peoples presente condition; and so I thinke will the reader too, when he well considers y^e same. Being thus passed y^e vast ocean, and a sea of troubles before in their preparation (as may be remembred by y^t which wente before), they had now no freinds to wellcome them, nor inns to entertaine or refresh their weatherbeaten bodys, no houses or much less townes to repaire too, to seeke for succoure. It is recorded in scripture⁵⁾ as a mercie to y^e apostle & his shipwsaked company, y^t the barbarians shewed them no smale kindnes in refreshing them, but these savage barbarians, when they mette with them (as after will appeare) were readier to fill their sids full of arrows then otherwise. And for y^e season it was winter, and they that know y^e winters of y^t cuntrie know them to be sharp & violent, & subjecte to cruell & feirce stormes, deangerous to travill to known places, much more to serch an unknown coast. Besids, what could they see but a hidious & desolate wildernes, full of wild beasts

& will men? and what multitudes ther might be of them they knew not. Nether could they, as it were, goe up to y^e tope of Pisgah, to vew from this willdernes a more goodly cuntrie to feed their hope; for which way soever they turnd their eys (save upward to y^e heavens) they could have litle solace or content in respecte of any outward objects. For summer being done, all things stand upon them with a weatherbeaten face; and y^e whole countrie, full of woods & thicketts, represented a wild & savage heiw. If they looked behind them, ther was y^e mighty ocean which they had passed, and was now as a maine barr & goulfe to seporate them from all y^e civill parts of y^e world. If it be said they had a ship to sucour them, it is trew; but what heard they daly from y^e m^r. & company? but y^t with speede they should looke out a place with their shallop, wher they would be at some near distance; for y^e season was shuch as be would not stirr from thence till a safe harbor was discovered by them wher they would be, and he might goe without danger; and that victells consumed apace, but he must & would keepe sufficient for them selves & their returne. Yea, it was muttered by some, that if they gott not a place in time, they would turne them & their goods ashore & leave them. Let it also be considered what weake hopes of supply & succoure they left behinde them, y^t might bear up their minds in this sade condition and trialls they were under; and they could not but be very smale. It is true, indeed, y^e affections & love of their brethren at Leyden was cordiall & entire towards them, but they had litle power to help them, or them selves; and how y^e case stode betweene them & y^e marchants at their coming away, hath allready been declared. What could now sustaine them but y^e spirite of God & his grace? May not & ought not the children of these fathers rightly say: *Our faithers were Englishmen which came over this great ocean, and were ready to perish in this willdernes;⁶⁾ but they cried unto y^e Lord, and he heard their voyce, and looked on their adversitie, &c. Let them therefore praise y^e Lord, because he is good, & his mercies endure for ever. Yea, let them which have been redeemed of y^e Lord, shew how he hath delivered them from y^e hand of y^e oppressour. When they wandered in y^e deserte willdernes out of y^e way, and found no citie to dwell in, both hungrie, & thirstie, their sowle was overwhelmed in them. Let them confess before y^e Lord his loving kindnes, and his wonderfull works before y^e sons*

of men.

先ず彼等は陸地の探検をすることになり、16名の隊員を組織して出かけ、犬をつれた数員のインディアンたちに出くわすが彼等の姿を見るとインディアン達は逃げ去る。水の欠乏のために苦しんだあげく、ついに泉を発見した時の喜びを次のように言っている。

But at length they found water & refreshed themselves, being y^e first New-England water they drunk of, and was now in their great thirstie as pleasure unto them as wine or bear had been in for-times.

Bk. I, Chap. X.

三度目の探検で湾内奥深く進み夜営するが、朝方インディアン⁷⁾の来襲にあう。矢がはげしく飛んで来るが、こちらは銃を丁度舟の方にもって行ったところで、手元にある4丁だけで応戦。やがて敵は後退するが一人だけ手ごわいのが木の陰からしきりに矢を放つ。この男は三度の銃撃にたえていたが、最後にねらい打ちした弾が彼のかくれていた木の皮や木片を耳のあたりに飛び散らすと、おそろしい声をあげてにげた。

He stood 3 shot of a musket, till one taking full aime at him, and made y^e barke or splinters of y^e tree fly about his ears, after which he gave an extraordinary shriek, and away they wente all of them.

Bk. I, Chap. X.

その後雪や雨がふり出し、荒波の中に舟を進めるが、舵がこわれ、マストは折れ、帆は水につかり、ついに鳥かげの風下に一夜をあかす。やっと火をたくが夜はひどく凍る。翌日は快晴。ぬれたものを干し、元気を回復することが出来、神に感謝する。そのあくる日は日曜日、安息日を守る。さらに月曜日、港の深さを計ると航行に適することを知る。上陸して見ると、⁷⁾とうもろこしを植えていた畑や小流がある。定着地として適すると判断し、その情報をもって本船に帰り大いに喜ばれる。本船 *Mayflower* がその地についたのは12月26日であった。

さて冬を越すうちに彼等の数が約半分に減ったことは前述の通りだが、三月の半ばに英語を話せる *Samoset* 及び *Squanto* があらわれ、首長 *Massasoit* に紹介のはしわたしをする。彼等の間に和平が結ばれて事が軌道にのるのであるが、このインディアンたちのお陰で、かけがえのない利便を得ることになった。春に向うと死者も減り、病人たちも元気を取りもどす。

The spring now approaching, it pleased God the mortalitie begane to cease amongst them, and lame recovered apace, which put as it were new life into them; though they had borne their sadd affliction with much patience

& contentednes, as I think any people could do. But it was y^e Lord which upheld them, and had beforehand prepared them; many having long borne y^e yoake, yea from their youth.

Bk. II, *The remainder of Ano*: 1620.

植民という難事業の中には思いもよらないいろいろな突発事件が起って来る。それらを Bradford は graphic にまた vivid に描いているが一、二の例をひろって見よう。1633年の頃にもものすごい蠅⁸⁾の発生がある。大きな蜂の様な蠅が地中の穴から飛び出し、森の葉を食いつくす。森がそのわめき声で一ぱい。まるでつんばになりそう——

. . . and y^e spring before, especially all y^e month of May, ther was such a quantitie of a great sorte of flies, like (for bignes) to wasps, or bumble-bees, which came out of holes in y^e ground, and replenished all y^e woods, and eate y^e green-things, and made such a constante yelling noyes, as made all y^e woods ring of them, and ready to deafe y^e hearers. They have not by y^e English been heard or seen before or since.

Bk. II, Chap. XIV.

また彼等の建てた商館付近のインディアンたちが、ほうそうにかかった描写だが、インディアンたちは柔い布などを持たないため、皮がむけ、ほうそうがやぶれ、血みどろになり、くさった羊のように死ぬ。たきものがなく、木の皿や弓や矢すらもたいたり、水を取りにはい出して途中で死ぬものもある。商館の人びとは初めた感染をおそれていたが、見かねてめんどうを見てやる。

This spring, also, those Indeans that lived aboute their trading house there fell sick of y^e small poxe, and dyed most miserably; for a sorer disease cannot befell them; they fear it more then y^e plague; for susaly they that have this disease have them in abundance, and for wante of bedding & liñing and other helps, they fall into a lamentable condition, as they lye on their hard matts, y^e poxe breaking and mattering, and runing one into another, their skin cleaving (by reason therof) to the matts they lye on; when they turn them, a whole side will flea of at once, (as it were,) and they will be all of a gore blood, most fearfull to behold; and then being very sore, what with could and other distempers, they dye like rotten sheep. The condition of this people was so lamentable, and they fell downe so generally of this diseas, as they were (in y^e end) not able to help on another; no, not to make a fire, nor to fetch a litle water to drinke, nor any to burie y^e dead; but would strive as long as they could, and when they could pro-

cure no other means to make fire, they would burne y^e woden trays & dishes they ate their meate in, and their very bowes & arrowes; & some would crawle out on all foure to gett a litle water, and some times dye by y^e way, & not be able to gett in againe. But those of y^e English house, (though at first they were afraid of y^e infection,) yet seeing their woefull and sadd condition, and hearing their pitifull cries and lamentations, they had compassion of them, and dayly fetched them wood & water, and made them fires, gott them victualls whilst they lived, and buried them when they dyed.

Bk. II, *Anno Dom*: 1634.

その他この様な例では1635年8月の大暴風と大津波のこと、1639年6月の大地震のこと、また1637年 Pequent Indians との戦の場面なども挙げられよう。この Pequents との戦には次のような凄惨をきわめた場面がある。

It was a fearfull sight to see thus frying in y^e fyer, and y streams of blood quenching y^e same, and horrible was y^e stinck & sente ther of; . . .

2. この様に真摯な、また graphic で vivid な描写があるかと思えば、同じ達文の中でも humorous な彼的一面をうかがえるものもある。1628年の頃に出てくる Thomas Morton の話である。彼は Massachusetts に来り住んだ Captain Wollaston の部下で性質のよくない男である。主人の留守中に彼等の居所 Mount-Wollaston を Merie-mounte と変えて、May-pole を立て、インディアンの女を呼んで、飲み、おどり、ふざけたりした。

They also set up a May-pole, drinkind and dancing about it many days together, inviting the Indian women, for their consorts, dancing and frisking together, (like so many fairies, or furies rather,) and worse practises.

(イタリック筆者)

この fairies (妖精) の様ではなく furies (復讐の神) の様にとりう表現は rhetoric でいう pun であるが、なかなか humorous である。やがて彼は長官に戒告され、あとでは本国に帰されることになるのだが、その場所を人びとはさらに名を変えて Mounte-Dagon (俗神の山) と呼ぶようになったとある。

さてこの Morton なる男、インディアンたちに銃を売り、扱い方を教える。ついにはインディアンたちの方が射撃が上手になり、さらに弾丸の作り方も知る。時には英人に火薬のないときですら彼等がもっていて、英人が殺されたりする。利益のために同胞を売るとは gaine thirstie murderes (利にかわく殺人者たち) と呼ぶべきであろう。

そこで植民地の人びとは Morton の一味をおさえにかかるのであるが、手紙でおだやかにすすめても彼等は嘲

笑するばかり。それで Captain Standish が隊長となり彼等の家を取りまく。彼等はがっちり防備態勢をかためている。弾丸や火薬がテーブルの上にたくさんならべてある。

... and if they had not been over armed with drinke, more hurt might have been done.

…もし彼等が酒でおまけの防備が出来ていなければ、もっと傷害が出たであろう。

彼等がよっぱらっていたので怪我が少くてすんだとしゃれている。

彼等は家をこわされる心配から飛び出して来た。Captain Standish は Morton の銃をもぎ取る。

Neither was ther any hurte done to any of either side, save y^t one was so drunke y^t he rane his owne nose upon y^e pointe of a sword y^t one held before him as he entered y^e house; but he lost but a litle of his hott blood.

どちらにも実害はなかったが、敵の一人が前に居たものの剣で鼻先にかすり傷を受け、熱い血を少しばかり失った——などというのは正に humorous な表現である。

3. 今までの例では敬虔、真摯、また動的に vivid な面での著者の筆力がうかがえたが、彼自身正に冷静な、適確に事を判断する、また一方に極めて寛大な心がまえの人であった。またその様な人物でなければこうした難局は切りぬけられなかったであろう。そうした面をあらわす一、二の例をひいて見よう。

植民時代の文学に著名な Roger Williams についてであるが、彼は Massachusetts から移って来て、しばらく彼等と共にいた。彼は後に Rhode Island の建設につきし、インディアンの友となり、democracy の形成発展に大きな寄与をするのであるが、彼は Plymouth で教会員との間に意見の相違をきたし、急に去る。彼について Bradford は1633年の項で a mann godly & zealous, having many precious parts, but very unsettled in judgemente と評し、のち Salem でもトラブルをおこした彼について、

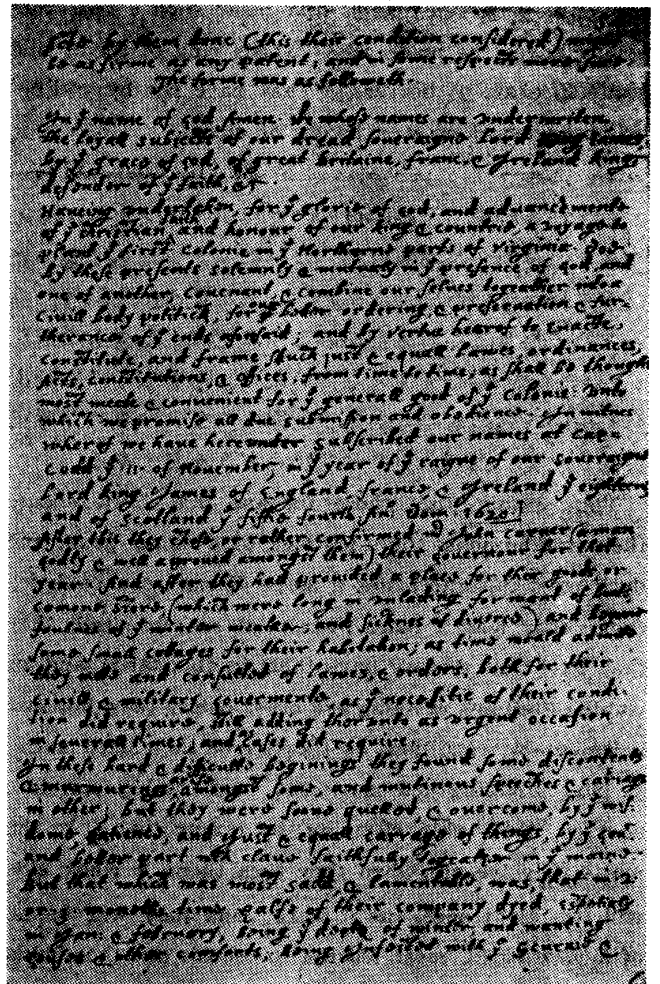
But he is to be pitied, and prayed for, and so I shall leave the matter, and desire y^e Lord to thew him his errors, and reduce him into y^e way of truth, and give him a setled judgment and constancie in the same; for I hope he belongs to y^e Lord, and y^t he will shew him mercie.

と祈っている。ここにも彼のあたたかい寛容な人柄がうかがえ、そのおだやかな筆致を見ることが出来る。

更に Bradford のかたよらない、常識性を示す意見として1641年の項に、牧師 Charles Chauncey と教会員の間 baptism についての意見の相違が語られる。Chaun-

cey は体全体を水につけること (dipping) を主張し、水をふりかける (sprinkling) などをみとめない。この様な寒い地方では体を水につけるなどは誰が考えても非常識であろう。Bradford は Chauncey を a reverend, godly and very learned man といっているが、ついに Chauncey はここを去ることになる。こうした事情は極めて淡淡と、気負わずに語られており、Bradford の冷静なおだやかさが文中ににじみ出ている。

4. 更に大文章としてあげるべきは、上陸前に船中で作成した最初の憲法とも言うべき The Mayflower Compact である。その原典は紛失し、ここに Bradford が書き残しているもののみが原典に近いものとして残っている。これは彼自身の手になったものかどうかは分らないが、彼のいきが通っていることは事実であろう。後の Declaration of Independence また Lincoln の Gettysburg Address をほうふつさせる簡潔な、力強い文字である。



The Mayflower Compact を含む頁

更にもう一つ挙げるべきは、終りに近い1643年の項にある William Brewster の死を語る切切たる文章である。

His sickness was not long, and till y^e last day thereof he did not wholly keepe his bed. His speech continued till somewhat more then halfe a day, & then failed him;

and about 9. or 10. a clock that evening he dyed, without any pangs at all. A few hours before, he drew his breath shorte, and some few minutes before his last, he drew his breath long, as a man fallen into a sound slepe, without any pangs or gaspings, and so sweetly departed this life unto a better.

5. その他 story として読んでも面白いところ——然も彼等の真実の経験——がいたるところに見出される。例えば畑を公共のものとして共同の収穫のために働いていた——一種の communism——の間は生産が上らず、畑を個人にわりあてると今まで働かなかった女たちまでが子供をつれて仕事に出て来たりして、生産が急速に上がったこと (Anno Dom: 1623) とか、いかさま牧師 John Lyford に手をやくこと (Anno Dom: 1624) とか、前にも一部引用した Pequet Indians との戦争 (Anno Dom: 1637) など、単なる fiction では書き得ないものである。又後世この時代を扱った画題——例えば Mayflower 号が帰る場面、家族たちが銃をもった男たちに守られて教会へ通う場面、最初の Thanksgiving, Christmas に通りで遊ぶ若者たちを叱る長老——等には直接または間接の影響があるであろう。

6. その文体について言うならば、前述の様に、幼時から Bible を熟読した彼は、その簡潔な style をそこから学び取ったものであろう。また Bible や古典への reference がふんだんに出て来る。そこに彼の学識もうかがえるのであるが、また linguist として rhetoric の上からも balance や contrast に意を用い、alliteration, metaphor, simile, personification などを自由に駆使し、また時には pun すらも見られる。それ等の例は前の引用からもうかがえるであろう。その様な工夫が文学としての本書の価値を一そう顕著なものとしている。

V. 結 び

今まで見て来たように、*Of Plimmoth Plantation* は単なる記録や歴史書でない。Mayflower 号に身を托して、たましいの自由を求めた Pilgrim Fathers のころ、すがた、経験を物語る大文学であり、真の意味のアメリカ文学は本書によって初まったといってよい。然もアメリカ文学に脈脈と流れる Puritanism の精神の源泉をなすものである。前述の様にこれは fiction ではなく、事実を淡淡と、力づよく、またいきいきと伝える document であり、そこに直接に迫ってくるものをもつ。今迄の文学史では本書の位置づけが不充分の様に思われる。これは名実ともにアメリカ文学の草分けであり、今繚乱の花ざかりをほこる文学の伝統の本源に、この清冽な泉を見出すべきである。

Notes

- 1) y^e=the
- 2) y^t=that
- 3) Cf. *Hebrews*, xi. 13-16 (Bradford). ここから彼等の呼び名 Pilgrim Fathers がおこった。Fathers といっても事実この当時の彼等の年齢を見ると、Bradford 31才, Edward Winslow 26才, John Alden 21才, Issac Allerton 34才, 軍事をひきうけた Miles Standish は36才で最年長であった。
- 4) Epist: 53 (Bradford).
- 5) Act. 28 (Bradford).
- 6) Deu; 26. 5, 7 (Bradford).
- 7) 1620年12月21日に当る。この地が Plimmoth で、彼等の出帆したイギリスの港と偶然同名であった。The remainder of Anno: 1620 の頃に Mr. Dermer の言葉としてこの地が Captain Smith の地図に Plimoth と呼ばれているとある。Bradford はこの地名を表題で Plimoth としている。
- 8) S. E. Morison によれば The seventeen-year locust, *Cicada septendecim*. とある。